

特別講演 要旨

国際音楽学会 2021 年グイード・アードラー賞受賞者特別講演

徳丸 吉彦

グイード・アードラー、音楽学、そして、音楽学の社会的役割

この度、国際音楽学会 IMS からグイード・アードラー賞を頂きました。IMS 会長のダニエル・チュア教授による授賞理由に、私の多様な活動の評価が記されていて、驚くとともに、感動しました。それを日本音楽学会の関係者が評価してくださり、今年の大会で講演する機会を頂きましたことにお礼を申し上げます。日本音楽学会（旧名 音楽学会）は私にとって知識の源泉でしたし、今でも会員の皆様の研究から多くを学んでいます。

私は 24 歳にして国立音楽大学楽理科に勤務し、音楽学の教育に関わり始めました。教え始めた頃、米・独・仏の音楽学概説書を読み、そして、アードラーの「音楽学の範囲・方法・目的」(Adler 1885)を意識しました。しかし、自分の研究関心に当てはまる単独の部門を見つけられませんでした。

当時の国立音楽大学学長の有馬大五郎先生はウィーン大学でアードラーの講義を聞き、『史料学に基づく日本音楽の歴史』という博士論文を提出されましたが、アードラー分類によると、日本音楽の研究は、たとえ歴史研究でも、体系的部門の一つである比較音楽学とみなされたのです。そこで、1985 年にアードラー論文百年記念のシンポジウム（オーストリア）に招かれた際に、私は「音楽学のどの部門で、日本音楽は研究されるべきか、また、研究されうるか」という発表でアードラー分類に異議を唱えました (Tokumaru 1986)。賛成してくれたのは、アメリカのブルーノ・ネットウルさんだけでした。

この論文を書いた背景には、理論と現場の間から音楽を考える私の傾向がありました。音楽に関わる音楽行動を重視しようとしたのです。音楽行動を扱う民族音楽学に接近したのもそのためです。そして、理論と現場を結びつける行為として提案したのが、“fieldback”（研究成果を現場に戻す）という概念でした。

この概念を作った経緯とこの概念を拡大するに至った私の歴史を中心にお話します。